

# 1951年のニェゴシュ歿後百周年 社会主義期モンテネグロにおける文化政策と ペタル2世の正典化<sup>1</sup>

中澤 拓哉

## はじめに

パルチザン闘争を経て樹立された社会主義ユーゴスラヴィアにおいて、モンテネグロ人<sup>2</sup>は独立した民族<sup>ナード</sup>であると認定され<sup>4</sup>、モンテネグロには共和国の地位が与えられた<sup>5</sup>。社会主義体制が成立した直後から、モンテネグロには、19世紀の<sup>ヴラディカ</sup>主教公ニェゴシュ（Njegoš）<sup>6</sup>を記念する機会が立て続けに訪れることとなった。1947年の『山の花環』出版100周年、1951年のニェゴシュ歿後百周年<sup>7</sup>、そして1963年のニェゴシュ生誕百五十周年である。

本稿はこのうち、特に1951年の歿後百周年、モンテネグロにおける「20世紀の文化史的出来事で最も意義深いものの1つ」[Jović i Kovačević 129]とも評される祝賀（proslava）に注目する。この祝賀に際しては、旧都ツェティニェで連邦や他共和国の要人が参加する式典が行われたのみならず、他共和国の作家も含んだ美術展が開かれたり、公式の新聞である『ポビェダ（Pobjeda）』<sup>8</sup>において「ニェゴシュ年（Njegoševa godina）」を冠した記事が複数掲載されたりするなど、全共和国規模でニェゴシュ歿後百周年が祝われた。この祝賀は社会主義体制成立直後に行われたものであり、社会主義期のニェゴシュ利用の変容を検討する上で起点となるべき出来事であろう<sup>9</sup>。

社会主義期のモンテネグロにおけるニェゴシュの正典化<sup>10</sup>は、近年研究が進展している領域である<sup>11</sup>。アンドリュー・ワクテルやフランシシェク・シーステク、ブレドラグ・マルバシャによる研究は長い時間軸の中で社会主義期にも触れる程度に留まっていたが [Malbaša 291–300; Šistek, “Njegošova” 406–418; Wachtel 140–145]、ヴラディミル・ドゥロヴィチやドラグティン・パポヴィチによって社会主義期のニェゴシュ表象を本格的に扱う研究が発表された [Dulović; Papović, “Njegoš”]。そしてポバン・バトリチェヴィチはニェゴシュ表象の歴史について単著を著し、その1章において社会主義期におけるニェゴシュ表象を検討している [Batrićević, *Bog* 205–262; “Red”]。これらの研究によって、ニェゴシュが社会主義体制下において「人民解放闘争」などの社会主義的な再解釈を施され、またセルビア人ではなく「モンテネグロの詩人」として顕彰されるようになっていった過程は概ね明らかにされているが、研究されている範囲に偏りがあり、20世紀のニェゴシュ表象を語る上で重要なニェゴシュ廟（Njegošev mauzolej）につ

いては詳細に明らかにされている一方で、それ以外については研究が端緒についたばかりである。

本稿で取り扱う 1951 年の祝賀に関しては、モンテネグロ国立文書館にニェゴシュ百周年祝賀委員会（以下「祝賀委」と略）の史料群が所蔵されており<sup>12</sup>、イスイドラ・コヴァチュヴィチとタティヤナ・ヨーヴィチはそれを用いて祝賀委の組織や詳細な式次第について明らかにした [Jović i Kovačević; Kovačević]。彼女たちの研究は多くの史料の翻刻を伴っており、同史料群の体系的整理を目指したものとして高く評価できよう。しかし一方で彼女たちの研究でも活用されていない史料は存在する。また上述のドゥロヴィチも同史料群を用いて 1951 年の祝賀におけるニェゴシュの聖堂とロヴチェンの表象について論じているが、聖堂やロヴチェンとは無関係な文脈でのニェゴシュ表象については殆ど触れていない [Dulović 240–242]<sup>13</sup>。パポヴィチやバトリチュヴィチは 1951 年の祝賀にも触れてはいるが主に定期刊行物に依拠しており、文書館史料の検討が十分ではない [Batričević, *Bog* 221–230; Papović, “Njegoš” 238–240]<sup>14</sup>。

本稿はこれらの先行研究および翻刻を参照しつつ<sup>15</sup>、同史料群のうちで彼らが利用していないものも活用し、ニェゴシュ歿後百周年祝賀についてより精緻な像を描き出すとともに、モンテネグロの社会主義者たちがかつての主教公を「社会主義的に」読み替えていった過程を検討することで、モンテネグロの民族問題研究に対して貢献をなしたいと考える。

## 1947 年の祝賀

1951 年の祝賀を検討する前に、その 4 年前に行われた 1947 年の『山の花輪』百周年祝賀について簡単に検討したい。この祝賀は社会主義体制成立後初の大々的なニェゴシュに関する祝賀であり、1951 年の祝賀を考える上で前提となる行事であるといえる。

この祝賀にあたっては『山の花輪』百周年祝賀国家委員会 (Državni odbor za proslavu stogodišnjice Gorskog vijenca) が設置され、記念式典や文化事業を組織した<sup>16</sup>。2 月から全ての学校や文化機関で『山の花環』に関する講義を実施し、5 月 18 日までに全ての新聞・雑誌に『山の花環』の特集記事を載せ、音楽祭も開催するなど、国を挙げて『山の花環』を記念する態勢を組んだ<sup>17</sup>。

6 月 8 日から 9 日にかけて行われた記念式典では、当時のモンテネグロ政府首班ブラジヨ・ヨヴァノヴィチ (Blažo Jovanović) らがビリヤルダ<sup>18</sup>などの施設を視察し、ロヴチェン山の頂上にあるニェゴシュの聖堂を見学した後、ニェゴシュの生地であるニェグシを訪れる式次第となっていた。夜には祝宴が催され『山の花輪』の朗読や民族舞踊の披露、民族楽器の演奏などが行われることとされた<sup>19</sup>。

その式典では、ヨヴァノヴィチや文学者のラドヴァン・ゾゴヴィチ (Radovan Zogović)、イ

ヴォ・アンドリチ (Ivo Andrić) らが講演した。ヨヴァノヴィチは、『山の花輪』を「奥深く刺激的な愛国主義讃歌」とし、パルチザン闘争と結びつけ、そして祝賀を「文化革命の [kulturne revolucije] 一部」であると位置づけた<sup>20</sup>。またボスニア出身のアンドリチは、ニェゴシュを「詩人でもあり兄弟愛と統一の熱烈な支持者でもある [i pjesnika i pobornika bratstva i jedinstva]」<sup>21</sup>として讃えた。そしてティト (Tito) は『山の花輪』百周年祝賀委に電報を送り、ニェゴシュを「南スラヴ人の偉大な詩人、モンテネグロの息子 [velikog pjesnika Južnih Slovena, sina Crne Gore]」<sup>22</sup>とした。このようにニェゴシュの作品は、新たに社会主義イデオロギーに基づいて再解釈されることになったのである。

かような言説は新聞のなかにも見られた。『ポビェダ』のある記事では、『山の花環』で描かれたオスマン帝国との紛争は自由のための愛国的闘争と位置づけられ、パルチザン戦争と比肩しうるものとされた<sup>23</sup>。同紙に掲載された他の論説では、『山の花輪』における闘争を人民の抵抗としたり<sup>24</sup>、七・一三蜂起 (Trinaestjulski ustanak) と同列に置いたりする解釈が開陳されている<sup>25</sup>。クロアチアの『ヴィエスニク (Vjesnik)』紙は、『山の花輪』100周年はユーゴスラヴィアの全民族にとっての祝日だと位置づけた [Wachtel 141]。

興味深いことに、記念式典におけるゾゴヴィチの講演では、ニェゴシュが何よりもまずモンテネグロの作家であるという考えを「真実ではない」として批判し、「事実、ニェゴシュはみずからをモンテネグロ人であると同時にセルビア人と考えていたのだが、彼はモンテネグロの全氏族が [みずからを] モンテネグロの [氏族] でありセルビアの [氏族] であると考えている時代に生きていたのだ」としている。そしてその後モンテネグロ<sup>ナツィヤ</sup>民族が形成されたため、モンテネグロ<sup>ナツィヤ</sup>民族の社会史・文化史の中に位置づけられるのだが、同時に確実に「セルビアの [詩人] でも、ユーゴスラヴィアの詩人でもある [i srpski, i jugoslovenski pjesnik]」として、彼がセルビア民族に属することを否定してはいない<sup>26</sup>。セルビア文学者協会会長ミラン・ボグダノヴィチ (Milan Bogdanović) は、ニェゴシュが『山の花輪』を「われわれの文化に [našoj kulturi] 贈った」<sup>27</sup>と述べている。この段階では、モンテネグロ人とセルビア人とのあいだに明確な区分を設けようとする意識はさほど強くなく、モンテネグロ側もセルビア側も、ニェゴシュが<sup>ス</sup>セルビア<sup>フ</sup>民族<sup>ス</sup>の詩人でもあると主張することに問題を感じていなかったといえよう<sup>28</sup>。

1947年の祝賀は、ニェゴシュを多民族国家であり社会主義国家であるユーゴスラヴィアの体制において解釈しようとした最初の試みであった。次節以降では、それを継承し発展させた1951年の祝賀について詳しく論ずる。

## 祝賀委の任命と組織

本節では、1951年祝賀委の組織および祝賀の大まかな計画について確認する。

祝賀の前年となる1950年に祝賀委が組織され、委員にはブラジョ・ヨヴァノヴィチやミロヴァン・ジラス (Milovan Đilas)、ヴェセリン・ジュラノヴィチ (Veselin Đuranović) といった共産党員のほか、歴史家ヤゴシュ・ヨヴァノヴィチ (Jagoš Jovanović)、作家ミハイロ・ラリチ (Mihailo Lalić)、彫刻家ペタル・ルバルダ (Petar Lubarda) といった文化人たち計29人が選任された [Kovačević 54]<sup>29</sup>。同年11月14日、祝賀委の第2回会合において、委員会が藝術・装飾、アカデミー・式次第、博物館、学術研究、宣伝・印刷、文化遺産展示、財務の7部門に分けられる [Jović i Kovačević 134]<sup>30</sup>。

祝賀委は祝賀の課題として、① ビリャルダの改築、② イヴァノヴァ・コリタからロヴチェンまでの自動車道建設<sup>31</sup>、③ ツェティニェにおけるニェゴシュ記念碑の建設、④ ニェゴシュ博物館 (Njegošev muzej) の開設準備、⑤ 祝賀記念碑の建設、⑥ 『山の花輪』舞台化コンクールの開催、⑦ ツェティニェでのニェゴシュの作品を含む出版物の展覧会の開催、⑧ アルバムの出版、⑨ ツェティニェでの連邦美術展の開催、⑩ ニェゴシュの肖像の作成、⑪ ニェゴシュの肖像をあしらった記念切手の発行、⑫ 祝賀の記録映画の製作、⑬ ツェティニェでのフィルハーモニーの演奏会、の13項目を挙げた<sup>32</sup>。これらの課題を見ると、ビリャルダの改築やニェゴシュ博物館の建設といったニェゴシュ個人を顕彰する企画のほか<sup>33</sup>、美術展や演奏会といったニェゴシュに限定されない文化行事、そして道路の整備という文字通りのインフラストラクチャ整備に属するものが含まれていることがわかる。当時のモンテネグロはユーゴスラヴィア6共和国のうちでも開発途上にあっただが、当局はニェゴシュの祝賀にかこつけて文化的・社会的な基盤を整備しようとしていたことが読み取れる。

祝賀式典には、タイトのほか、各共和国の党中央委員会委員長、連邦政府首班、各共和国政府の啓蒙・文化・科学評議会議長、ユーゴスラヴィア連邦労働組合中央委員会委員長、ユーゴスラヴィア女性反ファシズム戦線指導者、各共和国の文学者同盟会長、マティツァ・スルプスカとマティツァ・フルヴァーツカ<sup>34</sup>の会長、といった人びとが招待されるべきとされた。モンテネグロ国内からは、党中央委員会および内閣の全員、ブラジョ・ヨヴァノヴィチら主要政治家が招待され、他共和国からは歴史家ヴラディミル・デディエル (Vladimir Dedijer) らが招待される予定となっていた [Kovačević 62–68]。

1950年12月、祝賀委は次のような通達を発する。

ニェゴシュの祝賀は単なるニェゴシュの神格化ではなく我々の文化遺産の具現化 [mani-

festacija naseg [sic] kulturnog nasledja] であり、我々の国で1941年から今日まで繰り返された文化革命の演出 [prikaz kulturne revolucije] でなければならない。ニェゴシュの祝賀との関連において、印刷物を通して、労働のあらゆる場所においても1951年1月1日から生きた活動を始める必要がある<sup>35</sup>。

1947年と同様に、社会主義政権下における「文化革命」を演出することが祝賀の目的であった。ここではニェゴシュは社会主義体制下での文化的・物質的發展の象徴的存在として扱われていることがわかる。またこれを補完するため、ラジオや新聞を通してプロパガンダを展開することが準備された<sup>36</sup>。

ニェゴシュの著作集を発行することも企画された。ヤゴシュ・ヨヴァノヴィチやラドヴァン・ラリチ (Radovan Lalić) は、豪華な装丁を施した4分冊のニェゴシュの著作集を発行する予定だと述べた<sup>37</sup>。最終的にベオグラド (Beograd) のプロスヴェタ (Prosveta) 社から6分冊で著作集が出版されたが (部数はおよそ4,000部)、それは戦後初のニェゴシュ全集であった<sup>38</sup>。

## 資料の蒐集

祝賀委はアルバムや博物館への収蔵のため、ニェゴシュに関連する資料を各地から蒐集しようと試みた。ヤゴシュ・ヨヴァノヴィチはベオグラド大学の学者に依頼し、『山の花輪』の手稿やその他の作品の初版本の蒐集を図っている [Jović i Kovačević 195]。また、ニェゴシュのみならず、その叔父ペタル1世の直筆の遺言の蒐集も試みられた<sup>39</sup>。

また、『山の花輪』の各言語訳の蒐集も進められた。1950年6月、ニェゴシュ博物館から図書室に6冊の訳本がないと報告があり<sup>40</sup>、そこから博物館も独自に訳本をリストアップし<sup>41</sup>、連邦政府に協力を要請し訳本の蒐集を開始した<sup>42</sup>。各国のユーゴスラヴィア大使館に対し、連邦政府を通して蒐集への協力を依頼したのである。しかしこの国外での蒐集は、必ずしもうまくいくとは限らなかった。ブダペシュト (Budapest) とヴァルシャヴァ (Warszawa) の大使館は、それぞれハンガリー語版とポーランド語版を見つけられなかったと報告している<sup>43</sup>。

古文書のみならず、肖像画も蒐集の対象となった。祝賀委は、ルーマニアのティミショアラ (Timișoara) に所蔵されているニェゴシュの肖像が国内のものよりも保存状態がいいとして、その拡大写真を入手するよう要請している<sup>44</sup>。

この過程で、海外のモンテネグロ系移民に対しても協力が呼びかけられた。祝賀委は、米国イリノイ (Illinois) 州シカゴ (Chicago) のパレンディチ出版社 (Palendich's Publishing House) なる会社に宛てて、次のような依頼を送っている。

署名したニェゴシュ歿後一世紀祝賀委員会の書記は、もし貴殿が貴殿の資料室において、オハイオ [Ohio] のクリーヴランド [Cleveland] で印刷された、ラーデ=ペタル二世ペトロヴィチ=ニェゴシュ主教公の記録から2つあるいはそれ以上の例を探し出していただけたならば、深く感謝するでしょう。[……]

貴殿は既に、百周年祭は9月初旬にツェティニエで開かれること、そして〔大西〕洋を越えて住む我らの民 [our people] が彼らの故国に来て我らの世代がいかに『山の花輪』の著者を祝賀するかを見るために招待されたことをお聞きになったと推察いたします。

返礼として、我々は貴殿にニェゴシュの全集もしくは彼の歴史と図像を含むアルバムをお送りすることができます<sup>45</sup>。

ほぼ同様の文面による依頼は、同じくシカゴ市内のモンテネグロ人教育クラブ「ニェゴシュ」にも送られた<sup>46</sup>。この文面からは社会主義イデオロギーは読み取れず、海外のモンテネグロ系移民に対して民族的親近感を持ち出して訴えかけていることがわかる<sup>47</sup>。祝賀委は国内に対しては社会主義的な正典化を推し進めながら、外部の「同胞」に対してはニェゴシュをモンテネグロの偉人としてのみ位置づけたのである。

### ビリャルダの改築とレリーフ

ニェゴシュの居館であり、『山の花輪』が書かれた場所でもあるビリャルダはツェティニエ修道院 (Cetinjski manastir) の近隣に存在するが、それを改築し、その傍にレリーフを設置するというのが、祝賀委の課題の1つであった。

1950年9月の会合では、ビリャルダ改築にともない、サヴィナ修道院 (Manastir Savina) やツェティニエ修道院、ニェゴシュの生家といったニェゴシュゆかりの史蹟の回復も必要であるとされた。また、党幹部のラドミル・コマティナ (Radomir Komatina) は、レリーフは世界唯一のものであるがゆえに必要だと主張した<sup>48</sup>。最終的に、ビリャルダの周囲に第4の壁を作ることが決定される。

1951年5月の段階では、ビリャルダを囲む第4の壁は9月1日までに完成する予定であるとされていた<sup>49</sup>。だが工程の遅れにより完成の見通しは立たなくなる。8月5日に開かれた祝賀委内部のビリャルダ改築委員会の会合で、祝賀までの日数が短いことから第4の壁は完成不可能であるものの、すべての作業が終了するまでビリャルダ改築委は解散しないことで決した<sup>50</sup>。数日後の会議で、ジュラジ・ボシュコヴィチ (Đurađ Bošković) 教授はレリーフを除去することによってのみ壁を建設できると主張し、ビリャルダ改築委はそれに同意する<sup>51</sup>。



ビリヤルダの改築にはクロアチアからも建築家が招聘されていたが<sup>52</sup>、最終的に工事計画の変更<sup>53</sup>に追い込まれた。当時のモンテネグロ政府がニェゴシュの記念を利用して大々的な文化施設・インフラストラクチャ整備を計画していたことを上で指摘したが、実行力の不足からそれを当初の計画通りに完遂することができなかったのである。

### 祝賀行事とその後

9月5日から8日にかけてのツェティニェにおける祝賀行事では、スィーマ・ミルティノヴィチ・サライリヤらの胸像の除幕、イヴァノヴァ・コリタからニェゴシュの墓までの遠足、といった式次第が組まれた<sup>53</sup>。

行事の開催に際しては、タイトに感謝の電報が送られている。そこでは「完全なユーゴスラヴィア諸民族の民族的解放と彼らの兄弟愛と平等の共同国家の建設」がニェゴシュおよび数世代にも及ぶ夢だったと綴られ、祝賀は「われわれの民族的な力の力強い表現へと変える」ものであると位置づけられる。「社会主義の建設と我ら諸民族の独立と文化的潮流の防衛のための大いなる戦いにおいて、ニェゴシュの不滅の作品は我々とともにあります」とした上で、電報はタイトに呼びかける。「タイト同志、我々の大いなる仕事を続けていきましょう、我らが世紀の闘いの流れを守っていきましょう」。そして「社会主義革命の完全な勝利と社会主義社会の建設」が訴えかけられるのである [Batrićević, *Bog* 229]。

祝賀委が関与したツェティニェの祝賀行事は9月に終わったが、それに前後して首都ティトグラード (Titograd) やニクシチ (Nikšić)、イヴァングラード (Ivangrad)、アンドリエヴィツァ (Andrijevica) といった国内の他都市でも地方的な祝賀は行われた<sup>54</sup>。また、記念映画『ニェゴシュ』はカンヌ (Cannes) とベアリン (Berlin) の国際映画祭への出展候補作にもなった [Papo-  
vić, “Njegoš” 240]。8月下旬には、ユーゴスラヴィア各地の芸術家の作品を集めた展覧会が開催された<sup>55</sup>。この展覧会にはすべての共和国から10人 (画家7人・彫刻家3人) の審査員が参加しており<sup>56</sup>、名実ともに全連邦規模の展覧会となった。モンテネグロ当局は祝賀を利用することで、これまでモンテネグロでは開催できなかったことのない規模の展覧会を開催することに成功した。共和国の文化的インフラストラクチャ整備という祝賀の目標は、ある程度達成されたということになる。

この時期のプロパガンダにおいては、モンテネグロ人とセルビア人を峻別しようという意識は弱かった。ドゥロヴィチは、この時期に飾られた肖像画には、モンテネグロの偉人やパルチザンの英雄だけでなく、サライリヤやヴーク・カラジチ (Vuk Karadžić) といった、ニェゴシュと大なり小なり関係のあった同時代のセルビアの偉人たちのものもあったと指摘する [Dulović

242]。

1951年の祝賀で特筆すべきは、ブラジヨ・ヨヴァノヴィチの演説にみられる反露主義である。1948年以来(すなわち、前回の祝賀よりも後)ユーゴスラヴィアとソ連は緊張状態にあり、ユーゴスラヴィア共産党は自国をソ連の影響圏でも西側でもないとする宣伝を推進していく[Gatalović 46]。そのような事情がヨヴァノヴィチの演説に投影されており、彼はニュゴシュ期のロシア外交は自国本位のものであったと指摘した後、ニュゴシュの闘争とソ連への「抵抗」とを結びつけた[Batrićević, *Bog* 222–226; Papović, “Njegoš” 238–239]。ニュゴシュは1951年の祝賀において、その「抵抗」の側面が強調されて論じられている。ツェティニエ周辺を統治する主教公にすぎなかった彼の行為は、南スラヴ諸民族の解放闘争という文脈の中に位置づけられ、「ファシスト」や「ロシア」といった「他者」に対する「われわれ」の表象として立ち現れる。その「われわれ」とは、この時期においては、南スラヴ諸民族を統合する社会主義ユーゴスラヴィアなのであった。そしてモンテネグロがユーゴスラヴィアの一構成単位であるがゆえに、モンテネグロの英雄としてのニュゴシュと南スラヴの抵抗の象徴としてのニュゴシュは難なく結びつくことができたのである。

歴史家ディモ・ヴヨヴィチもまた、1951年に書いた論文で『山の花輪』と七・一三蜂起およびそこに始まるパルチザン闘争とを結びつけ、ニュゴシュを「反ファシズム闘争の基礎を築いた人物」と解釈した[Batrićević, *Bog* 227–228]。そのようなニュゴシュの正典化は1950年代初頭をもって完成したといつてよいであろう。

## おわりに

本稿では1951年のニュゴシュの祝賀を扱った。この祝賀は、社会主義体制の確立期において、ニュゴシュが人民解放闘争を行った南スラヴ諸民族の英雄として正典化されていく端緒となったという点で意義深いものである。そのような意義は先行研究も指摘するところだが、本稿では加えて、モンテネグロという新しい共和国における文化的基盤の確立という視点から1951年の祝賀を分析することを試みた。ニュゴシュの記念を契機に多くの事業が行われ、それらの中には成功したものもあれば中途に終わったものもあったが、重要なのは、それらがモンテネグロ共和国という新しい枠組みの中で、社会主義イデオロギー(および、社会主義的な民族イデオロギー)に基づいて遂行されたという点である。1951年の祝賀は、ニュゴシュの正典化という主題のみならず、モンテネグロの文化的基盤の整備という文脈でも理解されるべきであり、正典化の過程と併せてそのような整備の諸相を明らかにしたことが本稿のモンテネグロ現代史研究への貢献であるといえる。



とはいえ本稿で取り扱った戦後直後の時代には、ニェゴシュがセルビア人かモンテネグロ人かというのは瑣細な問題でしかなく、「モンテネグロ民族」を制度化した共産主義者たちの間でも殊更に問題視する風潮は存在しなかった。だが1960年代以降になると、モンテネグロとセルビアの共産主義者たちはニェゴシュがセルビア民族にも属するという理解を「大セルビア主義」の表出として強く批判するようになり、ニェゴシュをセルビア人の作家とみなすセルビアの作家たちと激しく対立していくことになる。それについては稿を改めて論じたい。

また祝賀委が最初に掲げた課題のうち、ツェティニェに建立される予定になっていたニェゴシュの記念碑については、最終的にツェティニェのみならずモンテネグロのどこにも設置されることなく祝賀を終えることとなった [Malbaša 295]。このニェゴシュの記念碑をめぐる問題についても別稿で検討したいと考える。

<sup>1</sup> 本稿では、研究文献の類は現代言語協会 (MLA) 方式に準拠して引用し、文書館史料および同時代の定期刊行物は注記方式で引用する。引用文中における筆者による補足、省略および原綴の表示は [] で括弧で表記する。原綴の表示に際しては史料に現れる形をそのまま表示し、屈折を経ている場合であっても主格に直すようなことはしていない。

また、本稿は JSPS 科研費 17J04473 による研究成果の一部である。

<sup>2</sup> 本稿では、Crna Gora を「モンテネグロ」と表記する。その他、国名および民族名は慣用表記に従う。都市名および人名についてはなるべく原音に忠実な表記を採用した。

<sup>3</sup> 社会主義ユーゴスラヴィアにおいて、<sup>ナード</sup>民族とは自らの共和国を持ち得る集団を意味した。セルビア・クロアチア語の“narod”は他のスラヴ諸語と同様に「人民」「民族」「国民」などの幅広い人間集団を含意する語であり、より厳密に「民族」の意味で用いられる語としては“nacija”がある。本稿では、「民族」と訳し得る単語およびその派生語を日本語に訳する際には、適宜振り仮名を用いて原語を明確にすることとする。

<sup>4</sup> モンテネグロ人が自決権を持つべき「民族」とされたのは歴史上初めてのことであった [鈴木 328]。モンテネグロは1918年にセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国に併合されるまで独立国としての地位を享受していたが、その時期においてもモンテネグロ人はセルビア人の一部であると考えられており、セルビア人と別個の民族であると看做されることは稀だった。

<sup>5</sup> モンテネグロの民族問題 (crnogorsko nacionalno pitanje) を考える上で、モンテネグロが共和国としての地位を得たことは重要な出来事である。スイニャ・マレシェヴィチらは、社会主義期に「モンテネグロ・ナショナリズム」発生のための制度的な基盤——大学、歴史研究所、新聞など——が整えられたと論じ、現代モンテネグロの民族問題を分析する上での社会主義期の重要性を主張している [Malešević and Uzelac 696–704; Šistek, “Interpretace” 607–609]。プラニスラヴ・マロヴィチの研究は社会主義イデオロギーと民族問題との関係について長期的な視野から検討しているが、文化政策については概説的にしか論じていない [Marović]。モンテネグロにおける文化的施設の整備については、パポヴィチの研究が詳しい [Papović, Prilozi]。

<sup>6</sup> ベタル2世ペトロヴィチ=ニェゴシュ (Petar II Petrović-Njegoš)、通称ニェゴシュは1813年、ラディヴォ

イエ（ラーデ）・トモヴ・ペトロヴィチ（Radivoje “Rade” Tomov Petrović）としてロヴチェン（Lovćen）山麓のニェグシ（Njeguši）村に生まれ、12歳でツェティニェ（Cetinje）に上京しセルビア出身の家庭教師スィーマ・ミルティノヴィチ・サライリヤ（Sima Milutinović Sarajlija）に師事した。1830年に伯父ペタル1世の死去によってペタル2世としてモンテネグロの聖俗両権力を継承する（当時のモンテネグロでは正教会の主教が俗界の統治も担っており、この地位を主教公と呼ぶ）。統治のかたわら詩作を続け、1847年に『山の花環（*Gorski vijenac*）』を発表した。これは17世紀におけるオスマン帝国との紛争およびイスラームに改宗したスラヴ人への迫害を英雄的に描いたものであり、南スラヴ文学史上の傑作として評価されてきた。1851年に死去。以上の伝記的事実については田中一生涯の記述に依拠している〔Andrijašević 255–323; Osolnik 16–20; 田中 86–92〕。また、『山の花輪』の日本語訳も参照した〔ペトロビッチ＝ニェゴシュ〕。

<sup>7</sup> 本稿は数字表記に際してアラビア数字を用いることを原則にしているが、「百周年」の原語は“stogodišnjica”であり、史料においてこの表記が用いられる頻度は“100-godišnjica”のようなアラビア数字を用いた表記のそれよりも高いので、例外的にアラビア数字ではなく漢数字を用いる。「百五十周年」も上に準ずる。

<sup>8</sup> ワクテルは『ポビェダ』を *Pobeda* と表記しているが〔Wachtel 142〕、*Pobjeda* が正しい（“pobeda”はセルビアの語形）。筆者が実際に確認した当該時期の紙面でも *Pobjeda* となっている。

<sup>9</sup> この時期のユーゴスラヴィアにおける文化政策については、ミオミル・ガタロヴィチの研究が詳しい〔Gatalović〕。

<sup>10</sup> 伝統的な文学研究での「正典（canon）」とは読まれるべき古典を指す語であったが、現代の文学研究においては正典が形成される背後にある政治力学を検討する動きが盛んになっている〔Guillory 238=502; シラネ 14–16〕。つまり正典そのものの内的価値ではなく、「ある特定の時代の節目に、どのような理由からある特定のテキストが特権的な価値を与えられたのか。あるテキストが〔……〕どのように再定義され再解釈されてきたのか」という「持続的な過程」としての正典化（canonization; kanonizacija）が検討の対象とされるようになっているのである〔モストウ 323〕。そして正典化概念はテキストそれ自体のみならず人物にまで適用され得る。民族的詩人の正典化を比較検討したヨウン・カルトル・ヘルガソンによれば、「社会史の射程からは、かくのごとき正典化は一般的に問われているその人物が発達する社会＝政治的現実のなかで偶像化され、制度化され、そして動員されさえもすることを意味する」〔Jón Karl H. 166〕。近年、民族的詩人の正典化に関する研究はヨウン・カルトルやマリヤン・ドヴィチらによって進められており〔Dović; Jón Karl H.〕、その文脈に後述のバスカルの研究〔Baskar, “Njegos”; “Third”〕も位置づけられる。

<sup>11</sup> ボヤン・バスカルはニェゴシュの正典化を3段階に区分し、ニェゴシュが「ユーゴスラヴィアの詩人」であることを強調する社会主義期の正典化を「社会主義的なニェゴシュの再正典化〔socialistična Njegoševa rekanonizacija〕」と呼び、ニェゴシュを「セルビア人の詩人」とした「第1の正典化」に続く「第2の正典化」と位置づける〔Baskar, “Njegos” 22, 24〕。しかし彼は社会主義期についてはあくまで時代区分を提示したに留まっており、その内実に殆ど検討を加えていないことから、本稿では殆ど参照していない。また、戦間期ユーゴスラヴィアにおける正典化を「第1」と位置づける見方は19世紀後半から20世紀前半にかけてのモンテネグロにおけるニェゴシュ利用〔Batričević, *Bog* 75–137〕を軽んじており、再考を要するだろう。

<sup>12</sup> Državni arhiv Crne Gore, Odbor za proslavu Njegoševe stogodišnjice. 以下では DACG, Odbor/ДАЦГ, Оѡбор と略し、箱（fascikli）は fasc./фасц. と表記する。本史料群は2017年8月から9月にかけての調査時点においては体系的な整理が未だなされておらず、箱の中に雑多に文書が収められ文書番号なども振られていない状態であった。よって本稿では、文書に表題が記されている場合には表題を記し、文書の表題が詳らかでない場合には、宛先や日付などを表題の代わりとして用いて文書を特定する。引用に際して文書の情報は翻字せず、文書館の略号なども含めて文書で使われる文字に従った。

<sup>13</sup> なお、ドゥロヴィチはモンテネグロ国立文書館の史料を引用するにあたって文書群（fond）を指示するのに数字を用いているが（たとえば祝賀委の史料は ACG, 254 と引用されている）、同館の文書官が筆者に教示したところによれば、同館の文書群の正式名称は数字ではなく当該文書群に関わる組織（省庁など）の名

称であり、数字は文書群一覧を掲載しているカタログに便宜的に振られているものに過ぎず、文書館内で正式な整理番号として通用しているものではない。よってドゥロヴィチの引用方法は不適切なものである。また多くの文書群にはアルファベット3文字による略号が存在するが、祝賀委にはそのような略号が存在しない。したがって本来であれば引用の度に正式名称を記す必要があるのだが、本稿では他に委員会 (odbor) を冠する組織の史料を引用せず混同の恐れが存在しないことから、祝賀委の文書群を Odbor と略記する。これはあくまでも本稿に限った便宜上の措置であり、文書館の認める公式の引用方式ではないことを予め断っておく。

<sup>14</sup> 文書館史料に関しては、ヤドランカ・セルハノヴィチによる展覧会カタログが多くの重要な史料の存在に言及しているが、カタログとしての性質上存在を列挙するに留まっており、翻刻も分析もその本文ではなされていない [Selhanović]。

<sup>15</sup> 翻刻と原史料の双方を参照した場合は、原則として原史料の所蔵情報のみを記した。

<sup>16</sup> この委員会の活動について体系的な史料は未だ見つけられていないが、1951年祝賀委の文書群の中に1947年祝賀委の議事録の一部が残されている。ДАЦГ Одбор, фасц.1, Записник сједнице Државног одбора за прославу стогодишњице Горског вијенца, одржане 16. маја 1947. год. だが本文書はあまりに断片的であり、同委員会の活動の全体像を窺い知ることはできない。

<sup>17</sup> “Програм прославе стогодишњице Горског вијенца,” *Побједа*, 23. марта 1947., 6.

<sup>18</sup> ビリヤルダ (Biljarda) はツェティニェにあるかつてのニェゴシュの居館で、ここで『山の花輪』が執筆された。館の名はニェゴシュがモンテネグロで初めてのビリヤード台を設置したことによる。

<sup>19</sup> “Програм прославе стогодишњице Горског вијенца,” *Побједа*, 7. јуна 1947., 1.

<sup>20</sup> “Говор претсједника Владе НРЦГ Блажа Јовановића,” *Побједа*, 11. јуна 1947., 2.

<sup>21</sup> “Поздрав Ива Андрића, претсједника Савеза здружења књижевника Југославије,” *Побједа*, 11. јуна 1947., 5.

<sup>22</sup> “Телеграм маршала Тита Одбору за прославу стогодишњице ‘Горског вијенца,’” *Побједа*, 11. јуна 1947., 1.

<sup>23</sup> “Стогодишњица Његошевог Горског вијенца,” *Побједа*, 7. јуна, 1947., 1.

<sup>24</sup> М. Кажих, “Сукоб два схватања у Горском вијенцу,” *Побједа*, 30. априла 1947., 6.

<sup>25</sup> Богих Кажих, “Једна мисао Горског вијенца,” *Побједа*, 16. марта 1947., 6. 七・一三蜂起は1941年7月13日にイタリアの占領当局およびモンテネグロの傀儡政府に対して起こされた武装蜂起。

<sup>26</sup> “Његошева poema о борби и слободи: Предавање Радована Зоговића,” *Побједа*, 11. јуна 1947., 5.

<sup>27</sup> “У име књижевника Србије говорио је Милан Богдановић,” *Побједа*, 11. јуна 1947., 5.

<sup>28</sup> このような見解は、戦間期ユーゴスラヴィアにおける「地域的な意味においてモンテネグロ人として、民族的な意味でセルビア人として、そしてより広範な超民族的・一体性の意味においてユーゴスラヴィア人、すなわち大ユーゴスラヴィア人」[Šištec, “Njegošova” 401] というニェゴシュ理解が継続されているといつてよいであろう。

<sup>29</sup> 1950年8月25日、祝賀委の博物館部門指導者であるドラギチェヴィチは、共和国文部省にルバルダやミロ・ミルティノヴィチ (Milo Milutinović) ら7名を委員に任命し、資金援助を行うよう要請した。ДАЦГ, Одбор, фасц.1, Министарству просвјете НРЦГ, Одјељење VI, 25. VIII 1950.

<sup>30</sup> 各部門の指導者 (rukovodilac) は以下の通り。芸術・装飾部門指導者ルバルダ、アカデミー・式次第部門指導者ダニコ・レキチ (Danilo Lekić)、博物館部門指導者リスト・ドラギチェヴィチ (Risto Dragičević)、学術研究部門指導者ヤゴシュ・ヨヴァノヴィチ、宣伝・印刷部門指導者B・ショシュキチ (B. Šoškić)、文化遺産展示部門指導者アンドリヤ・ライノヴィチ (Andrija Lainović)、財政部門指導者スパノ・ミリチ (Spaso Milić)。

<sup>31</sup> 距離は4.5キロである。ДАЦГ, Одбор, фасц.1, Записник са састанка Државног одбора за прославу Његошеве 100-годишњице, одржаног 22. IX 1950. године у просторијама Главног одбора НР ЦГ, 2. Ивџанова Корита (Ivanova Korita) はロヴチェン山麓のリゾート地。

- <sup>32</sup> ДАЦГ, Одбор, фасц.1, Задаци за Његошеву прославу.
- <sup>33</sup> 計画されたニェゴシュ博物館は、モンテネグロ史上初めての個人を記念する博物館であった [Papović, “Njegoš” 240]。
- <sup>34</sup> マティツァ・スルプスカ (Matica srpska) はセルビア人の、マティツァ・フルヴァーツカ (Matica hrvatska) はクロアチア人の、それぞれ 19 世紀以来の歴史を有する民族文化団体である。
- <sup>35</sup> DACG, Odbor, fasc.1, [Sreskom] — gradskom [narodnom] odboru: Povjerenstvu za prosvjetu i kulturu, [2]. XII 1950., 2. 判別困難な文字は推測で補った。
- <sup>36</sup> DACG, Odbor, fasc.7, Zaključci sastanka sekcije za propagandu i štampu Odbora za proslavu 100-godišnjice Njegoševe smrti, koji je održan 18. XII. 1950 godine.
- <sup>37</sup> ДАЦГ, Одбор, фасц.7, Записник сједнице руководиоца секција Одбора за Његошеву прославу, одржане 8. маја 1951. у Централној библиотеци, 2.
- <sup>38</sup> Б., “Цјелокупна Његошева дјела,” *Стварање* 7, бр.12 (1952): 748.
- <sup>39</sup> 依頼を受けたベオグラドの学者たちは遺言状を見つけられなかったが、かわりにサライリヤの直筆の署名を発見した。ДАЦГ, Одбор, фасц.7, Одбору за прославу Његошеве стогодишњице, 28. VI 1951.
- <sup>40</sup> DACG, Odbor, fasc.1, Ministarstvu prosvjete NRCG, 23. VI 1950. 内訳は、ドイツ語が 2 冊、イタリア語・チェコ語・ブルガリア語・ロシア語がそれぞれ 1 冊。
- <sup>41</sup> DACG, Odbor, fasc.1, Prevodi “Gorskog vijenca,” 29. VI 1950.
- <sup>42</sup> DACG, Odbor, fasc.1, Savjetu za nauku i kulturu Vlade SFRJ, 1. VII 1950.
- <sup>43</sup> DACG, Odbor, fasc.1, Upravi Njegoševog muzeja, 22. IX 1951.
- <sup>44</sup> ДАЦГ, Одбор, фасц.7, Одбору за прославу Његошеве стогодишњице, 15. VIII 1951.
- <sup>45</sup> DACG, Odbor, fasc.7, Palendich’s Publishing House, 31. VII 1951.
- <sup>46</sup> DACG, Odbor, fasc.7, The Montenegrinian’s Aducaational Club “Njegosh” [sic]. シカゴは 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてアメリカ合衆国においてモンテネグロ出身の移民が定住したいくつかの都市のうちの 1 つであった [Leković 51]。
- <sup>47</sup> ただし「我らの民」という表現は、この手紙のセルビア・クロアチア語版にはみられない。DACG, Odbor, fasc.7, Palendich Izdavačka kuća, 1. VIII 1951.
- <sup>48</sup> ДАЦГ, Одбор, фасц.1, Записник са састанка Државног одбора за прославу Његошеве 100-годишњице, одржаног 22. IX 1950. године у просторијама Главног одбора НР ЦГ, 1–2.
- <sup>49</sup> ДАЦГ, Одбор, фасц.7, Записник сједнице руководиоца секција Одбора за Његошеву прославу, одржане 8. маја 1951. у Централној библиотеци, 1.
- <sup>50</sup> ДАЦГ, Одбор, фасц.7, Записник сједнице комисије за рестаурацију “Биљарде,” одржане 5. августа 1951. г. この会合には、祝賀委のヨヴァノヴィチ、ミルティン・プラメナツ (Milutin Plamenac)、ドラギチエヴィチらに加え、市人民委員会書記ルカ・イリンチチ (Luka Ilinčić) や建築委員会の代表である技師ラドヴァン・トモヴィチ (Radovan Tomović) およびイエヴト・ミロヴィチ (Jevto Milović) が参加した。
- <sup>51</sup> ДАЦГ, Одбор, фасц.7, Записник сједнице комисије за рестаурацију “Биљарде,” одржане 10. августа 1951. г.
- <sup>52</sup> アントン・パウエル (Anton Bauer) 博士がザグレブ (Zagreb) から招かれてビリヤルダ改築委に加わっていた。ДАЦГ, Одбор, фасц.7, Записник сједнице комисије за рестаурацију “Биљарде,” одржане 20. августа 1951. у Државном музеју на Цетињу.
- <sup>53</sup> “Програм прославе,” *Побједа*, 28. августа 1951., 2,
- <sup>54</sup> “Припреме за прославу у Андријевичком срезу,” *Побједа*, 21. августа 1951., 2; Д. Ј., “Послије прославе на Цетињу,” *Побједа*, 30. септембар 1951., 4.
- <sup>55</sup> К. К., “Свечано је отворена друга изложба Савеза ликовних умјетника Југославије,” *Побједа*, 26. августа 1951., 2.

<sup>56</sup> DRCG, Odbor, fasc.2, Zapisnik žirija Saveza likovnih umjetnika Jugoslavije za II saveznu izlozbu pritredjenu u cast stogodisnjice Njegoseve smrti na Cetinju [sic].

#### 引用した二次文献および翻訳文献

- Andrijašević, Živko M. *Dinastija Petrović-Njegoš*. Podgorica: Narodna knjiga; Beograd: Miba books, 2016.
- Baskar, Bojan. “Njegoš na Jadranu: Kaj imata črnogorski nacionalni pesnik in njegovo gorsko zatočišče opraviti z Mediteranom?” *Glasnik Slovenskega etnološkega društva* 56, št.1–2 (2016): 14–26.
- . “The Third Canonization of Njegoš, the National Poet of Montenegro.” *Great Immortality: Studies on European Cultural Sainthood*. Ed. Marijan Dović and Jón Karl Helgason. Leiden: Brill, 2019. 269–293.
- Batričević, Boban. *Bog našeg nacionalizma: Recepcija, reinterpretiranje i korišćenje Njegoševa lika i djela u političkoj propagandi i diskursu vlasti u Crnoj Gori od 1851. do 2013. godine*. Podgorica: Nova Pobjeda; Cetinje: Fakultet za crnogorski jezik i književnost, 2018.
- . “The Red Njegoš: Petar II Petrović in Yugoslav and Communist Ideology and Propaganda of Montenegrin Communists.” *Journal of Balkan and Black Sea Studies* 1 (2018): 115–133.
- Dović, Marijan. “Model kanonizacije evropskih kulturnih svetnikov.” *Primerjalna književnost* 35, št.3 (2012): 71–85.
- Dulović, Vladimir. “Mount Lovćen and Njegoš between ‘Aleksandar’s Chapel’ and ‘Meštrović’s Mausoleum’: Symbolic Orientation and Re-orientation of Montenegro in the Socialist Era.” *The Ambiguous Nation: Case Studies from Southeastern Europe in the 20<sup>th</sup> Century*. Ed. Ulf Brunnbauer and Hannes Grandits. München: Oldenbourg, 2013. 233–260.
- Gatalović, Miomir. “Između ideologije i stvarnosti: Socijalistički koncept kulturne politike Komunističke partije Jugoslavije (Saveza komunista Jugoslavije) 1945–1960.” *Istorija 20. veka* 27, br.1 (2009): 37–56.
- Guillory, John. “Canon.” *Critical Terms for Literary Study*, 2<sup>nd</sup> edition. Ed. Frank Lentricchia and Thomas McLaughlin. Chicago: The University of Chicago Press, 1995. 233–249 [=「正典」『現代批評理論——22の基本概念』F・レントリックアとTh・マクローリン編、大橋洋一ほか訳。東京：平凡社、1994。493–523].
- Jović, Tatjana, i Isidora Kovačević. “Odbor za proslavu Njegoseve stogodišnjice.” *Glasnik Narodnog muzeja Crne Gore*, nova serija 9 (2013): 129–238.
- Jón Karl Helgason. “Relics and Rituals: The Canonization of Cultural ‘Saints’ from a Social Perspective.” *Primerjalna književnost* 34, no.1 (2011): 165–188.
- Kovačević, Isidora. “Proslava 1951.” *Glasnik Narodnog muzeja Crne Gore*, nova serija 7 (2011): 53–68.
- Leković, Žarko. “Crnogorski emigranti u SAD krajem XIX i početkom XX vijeka sa osvrtom na iseljenike iz Drobnjaka.” *Medijski dijalozi* 1, br.3 (2008): 49–56.
- Malbaša, Predrag. “Spomenici Petru II Petroviću Njegošu.” *Matica* 55 (2013): 255–314.
- Malešević, Siniša, and Gordana Uzelac. “A Nation-State without a Nation? The Trajectories of Nation-Formation in Montenegro.” *Nations and Nationalism* 13, no.4 (2007): 695–716.
- Marović, Branislav. *Komunisti Crne Gore i crnogorsko nacionalno pitanje 1919–1989*. Nikšić: Centar za geopolitiku, 2017.
- Osolnik, Vladimir. *Literarna zgodovina o Petru II. Petroviću Njegošu*. Ljubljana: Znanstveni inštitut Filozofske fakultete, 2003.
- Papović, Dragutin. “Njegoš u socijalističkoj i nacionalnoj ideologiji Crne Gore 1945–1989.” *Matica* 55 (2013): 231–254.
- . *Prilozi za istoriju nauke i kulture u Crnoj Gori 1945–1990*. Podgorica: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 2015.
- Selhanović, Jadranka. *Njegoš u socijalističkoj Crnoj Gori 1945–1990: Katalog izložbe*. Podgorica: Državni arhiv Crne Gore, Arhivski odsjek SIO, 2013.

- Šístek, František. “Interpretace dějin Černé Hory na prahu 21. století.” *Slovanský přehled* 98, č.5 (2012): 575–621.
- . “Njegošova hrobka na Lovčenu: Proměny a reinterpretace místa paměti v kontextu sukcesivních politických, ideologických a nacionálních projektů, 1845–2010.” *Paměť míst, událostí a osobností: Historie jako identita a manipulace*. Red. Milan Hlavačka a kol. Praha: Historický ústav, 2011. 392–422.
- Wachtel, Andrew Baruch. “How to Use a Classic: Petar Petrović Njegoš in the Twentieth Century.” *Ideologies and National Identities: The Case of Twentieth-Century Southeastern Europe*. Ed. John Lampe and Mark Mazower. Budapest: Central European University Press, 2004. 131–153.
- シラネ、ハルオ「創造された古典——カノン形成のパラダイムと批評的展望」衣笠正晃訳。『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』ハルオ・シラネと鈴木登美編。東京：新曜社、1999。13–45。
- 鈴木健太「結合と分離の力学——社会主義ユーゴスラヴィアにおけるナショナリズム」『東欧地域研究の現在』柴宜弘ほか編。東京：山川出版社、2012。322–345。
- 田中一生『バルカンの心——ユーゴスラビアと私』東京：彩流社、2007。
- ペトロビッチ＝ニェゴシュ、ベタル2世『山の花環——17世紀末の歴史的事件』田中一生と山崎洋訳。ベオグラード：ニェゴシュ財団、2003。
- モストウ、ジョシュア『『みやび』とジェンダー——近代における『伊勢物語』』岡野佐和訳。『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』ハルオ・シラネと鈴木登美編。東京：新曜社、1999。322–365。



## **Proslava Njegoševe stogodišnjice 1951. godine Kulturna politika i kanonizacija Petra II Petrovića-Njegoša u socijalističkoj Crnoj Gori**

**NAKAZAWA Takuya**

U ovom članku, istražujem kanonizaciju Petra II Petrovića-Njegoša u socijalističkoj Crnoj Gori kroz proslavu stogodišnjice smrti Njegoša 1951. godine. Poslije Drugog svjetskog rata su komunisti Crne Gore kanonizirali crnogorskoga vladiku kao narodnog i „crnogorskog“ pjesnika, uprkos tome što je kanoniziran kao „srpski“ u prijeratnoj Jugoslaviji. Analiza „socijalističke“ kanonizacije Njegoša nam treba da razumjemo poslijeratno „izgradnje nacije“ u Crnoj Gori. Proslava 1951. je jedna od najranijih pokušaja kanonizacije Petra II Petrovića-Njegoša pod komunističkom vlašću.

Odbor za proslavu Njegoševe stogodišnjice bio je formiran 1950. godine. Odbor je planirao da prikaže „kulturnu revoluciju“ Crne Gore u periodu Narodnooslobodilačke borbe i u socijalističkom periodu. Komunisti Crne Gore su prikupili materijale o Njegošu, i *Gorski vijenac* je bio reprezentivan kao borba za slobodu naroda.

Proslava 1951. je bila kulturni projekat za formiranje socijalističkog kanona i izgradnje kulturne infrastrukture Crne Gore. Ovaj je projekat postavio temelj za kulturnu politiku u novoj socijalističkoj republici, međutim komunisti Crne Gore još nijesu imali strogu razliku između crnogorske i srpske nacije u ovoj proslavi. Ideja „crnogorske nacije“ je postojala ali nije bila stroga u prvoj polovini pedesetih godina dvadesetog vijeka.